



Title	日韓語の副詞終了文に関する対照研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	裴, 明文
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13283号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/72206">http://hdl.handle.net/2115/72206</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Pei_Mingwen_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 裴 明 文

## 学位論文題名

### 日韓語の副詞終了文に関する対照研究

#### ・本論文の観点と方法

本論文は、日韓両言語の話し言葉において現れる、文末を副詞で終える「副詞終了文」を研究の対象にして、対照言語学的観点からその分類や意味用法について新たに分析を行った論考である。述語を文末に置く通常の文とは異なる「副詞終了文」がなぜ、日韓語共に日常会話において多用されているのか、その理由を解明することが本稿の究極的な目的でもあり、以下のような手順を持って論を進めている。

まずは、先行研究を踏まえたうえで日韓語共通の「副詞」の分類を試みた。さらに日韓両言語に現れる「副詞終了文」のパターンをその統語的特徴から4つの種類に分け、それぞれの副詞終了文に現れる副詞の種類を浮き彫りにした。「副詞終了文」の使用目的を明らかにするために、最終的にはとりわけ「副詞終了文」の意味用法の解明に重点を置いている。論文は、全六章から構成されており、以下に章ごとの内容を述べる。

#### ・本論文の内容

第一章では、まず本論文における「副詞終了文」の定義について明確に述べている。さらに、本研究を行うことに至った研究背景や研究目的、研究方法及び本稿の構成について述べている。

第二章では、日韓両言語それぞれにおける、副詞の定義及び副詞の分類に関する先行研究を紹介し、最後には本稿の立場について述べている。従来、副詞の分類に関しては、両言語それぞれにおいて数々の立場や論考があるものの、対照言語学的観点からの分類を行っているものはなく、本稿で新たな日韓語副詞の分類を試みた。新たな分類には、特に韓国語の副詞を最も網羅して扱って分類を行っている Seo jeongsu (2005) を援用し、日本語においては従来の陳述副詞のカテゴリを廃止し、語用論的観点からそれに相応する四つの副詞に細分化した加藤 (2006) を援用している。

第三章では、まず、両言語の文献テキストや筆者の内省に基づき採集した実例を基に、統語論的観点から副詞終了文の分類を行った。その結果、日韓語共通に次のような4つの種類が存在することが分かった。反復型、後置型、述語省略型、文末副詞型がそれぞれあり、中でもとりわけ興味深いのは、文末副詞型である。「文末副詞型」は、他の三つ

の種類と異なって、唯一統語論的変化がないからである。つまり、反復型は、文末で文中の副詞が反復されているものであり、後置型は、副詞の元の文中の位置から文末に後置されていると解釈できるものであり、また述語省略型は、本来の述語が省略されているものであるのに対して、文末副詞型は、元からそもそも副詞が文末に置かれていると解釈せざるを得ないものである。いわば、オリジナル副詞終了文とも言えるものである。また、他の3種類の副詞終了文で用いられる副詞は、種類に制約がなく数が多いことに対して、文末副詞型に使用される副詞は、種類が限られていることが理由として考えられる。また、本章では第二章で提案した分類表を用いながら、四つの副詞終了文に用いられる副詞を持って、日韓語の相違点や類似点について考察を行っている。その結果、反復型、後置型、述語省略型においては、対応する副詞を挙げながらの対照考察ができた。一方、文末副詞型に用いられている副詞は、両言語においてそもそも異なる種類であることが明らかとなり、興味深い点である。

第四章では、両言語の副詞終了文の意味用法について考察を行っている。本論文では、先行研究における副詞の用法と後置文の用法を踏まえつつ、副詞終了文の意味用法として大きく次の三つを挙げている。

一つ目は、「強調の意味用法」である。「強調の意味用法」は、「量的強調」と「心理的強調」に分けており、「量的強調」はさらに「統語的強調」と「語彙的強調」に分けて考察を行った。その結果、この用法は、日韓両言語とも主に反復型と後置型における意味用法であり、用いられる副詞に関しても両言語がよく類似していることが分かった。

二つ目は、「斟酌委任の用法」である。この用法は、主に述語が表に出ない述語省略型における意味用法であること、また用いられる副詞は日韓語においてよく似ており、大差のないことが分かった。

最後に、三つ目の意味用法として、「感動詞的用法」を挙げている。この用法は、文末副詞型のみが持つ意味用法である。用いられる副詞は、日本語では「まったく」、「もう」、「ちょっと」、「まったくもう」が挙げられ、韓国語では「jinjja 本当」、「jeongmal 本当」、「aju とても」、「jjom すこし」、「maennal 毎日」、「jeongmalro jinjja 本当に本当」、「aju geunyang とてもただ」などがある。文末副詞型において、これらは副詞本来の意味とは異なる意味に転じている場合が多い。ここでさらに、日韓語の文末副詞型に焦点を絞り、副詞本来の意味を無くしている「脱語彙化現象」が起きているかどうか、また終助詞との併用が可能か否かという二つの観点から対照考察を行った。その結果、使用される副詞の数の面では韓国語が多い反面、脱語彙化現象の点からすれば、日本語の方が韓国語より進んでおり、また日本語では否定の評価感情を表す場合に限られていることが分かった。

第五章では、副詞の下位分類として考えられるオノマトペを対象にして、文末がオノマトペで終わるオノマトペ終了文について考察している。結果的に、オノマトペ終了文は、他の副詞とは異なり、話し言葉よりは新聞の見出しや広告のキャッチフレーズなど

で多用されていることが分かった。対照考察の結果、両言語とも意味用法としては、主に「斟酌委任の用法」を表しており、副詞終了文の種類としては「述語省略型」が多いという類似点が挙げられている。また日本語では、カタカナ表記を用いている場合が多いのに対して、韓国語では、最後にクォーテーションマークを付けている場合が多いことを指摘している。

最後に、第六章では全体のまとめと今後の課題を述べて、本論文を締めくくっている。